

## 障がい児共生保育 ～大切にしたい視点～ 知り合う・繋がる・響き合う

たなだ じゅんこ  
棚田 純子 さん（ちゃいるどネット大阪）

人権保育専門講座2は、ちゃいるどネット大阪理事の棚田純子さんに、「障がい児共生保育 ～大切にしたい視点～ 知り合う・繋がる・響き合う」をテーマでご講演いただきました。伊勢・尾鷲・桑名の3会場で開催し、計51名の方にご参加いただきました。

棚田さんからは、障がい児共生保育をすすめるうえで大切にしたい視点を、事例を挙げながらお話しいただきました。また、グループワークをとおして、参加者一人ひとりが「ともに育ち合う保育」の具体的なイメージを共有し合いました。



### はじめに —ともに育ちあう保育とは—

日本も批准している国連の「障害者の権利条約」がめざすのは「フルインクルージョン」です。これは障がいの有無にかかわらず、誰一人として排除されることなく一人ひとりの必要に応じた配慮や支援、環境のもと、同じクラスで保育・教育を行うという考え方です。“完全な包容”という意味です。この条約を象徴する言葉が「私たちのことを私たち抜きに決めないで」です。とても大切な言葉です。

支援を必要とする子の保育は、どの子にとっても必要な保育だと考えています。心地よく安心して過ごせる保育と言えます。「周りの仲間とともに育ちあう保育」がなければ、周りの仲間が無関心になったり、排除があったりして、その子にとって心地よい保育にはなりません。

子どもが社会で生きていくうえで本当に大切なことは“人とともに生きようとする力”です。それを0歳児から伝えることがとても大事だと思っています。一緒に生きていく大事さ、知り合うことの大事さ、支援を必要とする子どもの周りにはいる子どもたちにどういう力をつけていくか、そこを真摯に考える就学前の保育・教育のありようを築いていくことが重要になります。

2016年4月から障害者差別解消法が施行されて4年目を迎えています。この法律は障害の有無で社会を分けてきた社会のあり方を変えようとするものです。ハード面のバリアフリーは進められていきました。エレベーターやスロープがちゃんとあります。しかし、ソフト面で偏見や差別というバリアは取り除かれているのでしょうか。だれもが尊厳をもって生きられるようになっているのでしょうか。保育者一人ひとりが日々の保育をとおして、この法律を根っこの部分から支えるところに立っていただければうれしいです。



## 支援担当とクラス担任の役割

### ◆支援を必要とする子と周りの子をつなぐために

クラス担任は支援担当がいても、支援を必要とする子を中心に据えてその子を含めたクラスの担任であることを意識することが重要です。そのためには、園としてどんな共生保育をめざすのかを共有することが何よりも大切です。先生方が個人として、また園として共生保育をしていくうえで何を大切にしていこうかを出し合ってみましょう。その際には、周りの子も含めて「子どもにとって何が必要なのか」を出発点として考えることが基本です。そして、支援を必要とする子と周りの子のかかわる力をどのように育むかを具体的に出し合ってみましょう。

具体的には、個別の支援計画をクラスの指導計画と連動させるということです。担任が「Aちゃんは今何をしているかな？」とクラスに声をかけることで、周りの子がAちゃんに声をかけたり、かかわったりすることが増えていきます。

支援担当は、基本的には支援を必要とする子を含むクラス運営をスムーズにするための役割があり、支援を必要とする子と周りの子をつなぐ役割を担うものです。“支援が必要な子ができないことをサポートすることで周りの子と横並びにする”ことや“発育発達を促進する”ことが仕事ではありません。



支援担当とクラス担任の共通認識・共通理解・連携は必要不可欠です。



## 子どもどうしの対等とは？

### ◆お互いが気もちを出し合うことで対等な関係を

支援を必要とするAちゃんは、クラスの中でどのような見られ方をしているでしょうか。Aちゃん自身が感じているジレンマに気づく子はどれくらいいるでしょうか。対等な関係を築くために、周りの子にどんなにかかわりができるようになってほしいか、イメージを明確にもつことが必要です。例えば、Aちゃんを遊びに誘えるか、Aちゃんの気もちを聴こうとしているか、クラスの一人ひとりがお互いの気もちを出し合える関係になっているか、などです。このような力を育むためには先生がモデルを見せていく必要があります。一見、仲良く見えても、気をつけて見ていかないと、「してあげる」という姿勢がはびこっていることがあります。対等の関係は「そこに相手への尊敬があるか」がキーワードです。支援を必要とする子と周りの子を、何もかも同じにすることが対等の関係ではありません。特別扱いするのではなく、どの子にも個々の配慮が必要です。すべての子どもに同じ配慮をすることが対等の関係をつくることではありません。Aちゃんも周りの子も本当の思いが出せることが対等の関係であると思います。



## 「ともに育ちあう保育」とは

支援を必要とする子の周りの子にどんな力をつけたいか、具体的な話し合いがなされているでしょうか。まずはお互いを知り合う活動をたくさん行うことが大切です。相手のことを知らないことが偏見や決めつけ、差別につながっていきます。

支援を必要とする子、クラスで気になっている子は、園のなかで周りの子と仲間になっているでしょうか。支援を必要とする子と一緒に生活することで、周りの子が支援を必要とする子をどうみているのかが見えてきます。そこから「ともに育ちあう保育・教育」を構築することで確かな実践につながっていきます。お互いが仲間としてどんな声かけやかかわりをする子どもになってほしいか、そのための活動や保育者の配慮はどんなことが考えられるか。明日からの実践につながるように、意見交流をして、たくさん園に持ち帰ってほしいと思います。

支援を必要とする子も、周りの子も、園でともに生活する意味合いとは何でしょうか。「将来も含めて、地域で一緒に生きる仲間をつくる」ことにあります。卒園してからも、地域で声をかけ合える関係を見据えて、保育・教育をしていく必要があります。



## 「ともに育ちあう保育」実践に向けて



「違いを認め合う」ということは、おとなでも難しいことです。できるか、できないかが友だちを認める価値観になっていくと、支援を必要とする子どもにとって厳しいものがあります。保育者がモデルになって、違いを認める姿勢を見せていくことが必要です。また、保育者が子ども一人ひとりが育ってきた背景と向き合い、いろいろな活動を行うことで、子どもどうしがお互いを知り合い、子どもどうしの見方やかかわりが変わっていくことをめざします。

おとながとらえる「困った子」は実は「その子どもが困っている」ということなのです。どうしていいかわからない、今から何をするか見通しがもてない、「ちゃんとする」ということがどういう意味かわかならずに困っているのです。支援を必要とする子が今、どうしてほしいと思っているか。困っていないか。それを理解し、支えられる仲間を育むことを「ともに育ちあう保育・教育」と言っています。「Aちゃんはできない」ではなく、「Aちゃんにできることは何か」から考える発想が大切だと思います。一人ひとり違うことに気づいていく力です。見えにくい、歩きにくい、など個々の特性をお互いに知り合っているかということが、豊かにかかわっていくことにつながっていきます。

保育者が「今のかかわり、すてき！」と子どもの行動を認めていくことが大切です。困っている友だちに気持ちを向け、気づいて支え合える仲間になることをめざしていきましょう。

## 障がい児共生保育（「ともに育ちあう保育」）で大切にしたいこと

### ①両輪の保育

- ・支援を必要とする子と周りの子、双方の課題を見据えて保育・教育を進めること

### ②子ども一人ひとりを一人の人間として尊重する視点

- ・行動、表情、仕草など非言語の表現からその子がどうしたいのかを読み取ること

### ③Aちゃんと周りの子がどれだけ知り合っているか

- ・「好きな友だちがいるか」がキーワード
- ・「できる」「できない」の価値観ではなく、肯定的な言葉をかけ周りに広げていくこと

### ④Aちゃんと周りの子は、対等の関係にあるか

- ・子どもたちが本当の思いを出し合えること

### ⑤「〇〇ちゃんはどうしたいかな？」と考えられる仲間のつながりを！

- ・知り合う活動を続けることで、子どもどうしが理解し合い、Aちゃんの意味を尊重する関係性をつくること

## 参加者の感想

○担当クラスの支援児の姿を常に浮かべ、また、自分の保育をふり返りながら講座を受けさせていただきました。支援児と周りの子どもたちを分けることなくかわり、また、つながりを作っていく保育を心がけようと思いました。小学校への進学までに仲間としてのつながりを深めていけるようにしたいと思います。



○両輪の保育の大切さ、そのために教師の配慮がとても重要になることを学ばせてもらい、子どもたち一人ひとりの意見を聞いていたのかとふり返ることができました。

○ワークをする中で、Aの困っていること、まわりの子の見方、どんなかわりをしてほしいのか…を具体的に考える機会になりました。お互いのことを知り合うための活動や声かけを明日から意識していきたいと思いました。

○難しいテーマだと思いましたが、グループでの話の中で“人として接することができたら相手に伝わる”だろうという意見が出てきて、なるほどなと思いました。他の園の方と話もできてよかったです。

○ワーク1～3で子どもの姿、まわりの子どもたち、教師のかかわりを整理したことで、次にしようと思っていたことの矛盾が見えました。また、グループの人の話を聞き、その人の中の無意識の意識が見えた気がします。まずおとなが「〇〇だから仕方ない」「この子は〇〇してあげなきゃ」という意識を変えないといけないと思いました。深く話をする時間がなかったので残念でしたが、人の思いを聞くことで自分の思いにも気づくことができました。